

研究所だより

(発行) 土佐清水市教育研究所
二〇〇八年十一月四日
第二七六号
問い合わせ(八二) 三〇一六

バトンペンダング...

その二

車椅子バスケットに関わらせてもらったことで、いろんなことを気づかせてもらえました。日本代表として北京パラリンピックに出場した種田さんは、いつも明るく、会うと「源さん」「源さん」と、気軽に声をかけてくれます。彼女に重い障がいがあることを忘れてしまいうらいです。彼女は高校生の時に事故で半身不随になりました。車椅子の生活になりました。そのときにはほんとうに落ち込みました。自分の人生を悲観したそうなんです。その中で車椅子バスケットに出会って自分を取り戻すことができて、そして同じチームに所属しているご主人と出会い、今は幸せな家庭を築いています。全日本の選手になるために二人で支え合ってききました。二人を見てみると、本当に素晴らしい姿だと思っています。それぞれいろいろな姿を見て私は、それぞれいろいろな考え、思いをしてきていること、いろいろな見方、考え方、「かわいそうだ」という高飛車な考え方をしていたことを気づかせてもらいました。ある私たちは、ほんとうに障がいのある人たちの視線で考えているのだ。戸でかと思うことがあります。その大会に審判として参加した時のことを。私は元全日本女子の主将をつとめたこともある森田さん(高知市在住)の車で神戸まで行くことになりました。アクセルやブレーキなどの車です。元操作です。内心(大丈夫かな)と不安な気持ち

ちも持ちながらも...失礼な話です。森田さんもすぐ明るい人で、神戸まで楽しいドライブになりました。した。しかし、ドライブ休憩をしようとする者専用の駐車スペースに車を止めた。助手席の私でさえ、気づくぐらいです。ぐく配のきつい駐車を降ろし、それに乗り替えるな。ど一人ではとても。難しいようなもの。で設置した。ただ障がい者用のスペースと、ごった感じ、思いをしました。私たちの身近なところでも、障がいのない人が、障がい者用の駐車スペースにあたりまえのように車を止めている光景をよく目にします。「ちょっとぐらいやったらえい」という軽い気持ちだと思えます。私自身も急いでいる時など「まあ、えいか」と思ったりもします。でもその時には種田さんや森田さんのことを思い出し、別のスペースを探して駐車するようにしています。

次号へ続く

(文責・山崎)

希望があれば...

教育研究所に保管してほしい、蔵書やビデオ、DVDなどの視聴覚教材があればお知らせ下さい。

半日教研です

十一月十二日(水)は半日教研です。各部会の会場や日程・内容等、開催要項をご確認のうえ、ご参加ください。

